

報告

シネマ哲学カフェ緊急特別企画

パレスチナ占領を知る、そして考える

土井敏邦監督『沈黙を破る』上映会＋ダイアログ

是恒 香琳

永井 玲衣

開催日：2023年11月23日（木）
進行：中野晃一（上智大学グローバル・コンサーン研究所）
是恒香琳
永井玲衣
参加者：135人

企画の背景と概要

日々深刻化するガザ情勢を受け、パレスチナ占領がどのようにつづいてきたのかを知り、人びとと共に考える場を持つため、上智大学グローバル・コンサーン研究所の中野晃一所員とともに本企画を行った。

人びとと集い、考える場を持つためには、現在何が起きており、そして何が起きてきたのか、そこにどんな構造があるのかを見出し、学ぶ必要性があることを感じ、上映会も合わせて行うこととなった。映画は『沈黙を破る』（土井敏邦監督、2009年、配給：シグロ）とし、長編ドキュメンタリー映像シリーズ「届かぬ声—パレスチナの占領と民衆—」4部作の第4部に当たる作品を上映した。2004年6月、イスラエルの元将兵だった青年たちによる『沈黙を破る』と名づけられた写真展は、「世界—道徳的」な軍隊として占領地に送られた元兵士たちが、自らの加害行為を告白するものであった。占領地で絶対的な権力を手にし、次第に人間性や倫理、道徳心を失っていった若者たち。かれらは、自らの人間性の回復を求めつつ、占領によって病んでいく祖国イスラエルの蘇生へと考えを深め、インタビューに応じることになる。監督は、ジャーナリストとして20数年にわたりパレスチナ・イスラエルを取材してきた土井敏邦氏である。

本作を通し、イスラエル軍による「占領という構造的な暴力」の実態がいかなるものであり、どのような文脈をもって、現在の情勢につながっているのかを知る契機となればと考え、土井監督の同意を得て、自主上映の運びとなった。

また、集まった人びとと共に対話を通して、現在を描く言葉を探していくこと、そして共に生きていくことを手放さないように考えることを試みる機会を設けた。その際、運営側からグラウンドルールを設けた。映画の上映は2時間以上と長丁場ではあったが、その後休憩をはさんだあと、30分のダイアログの時間とした。

映画の上映

映画『沈黙を破る』は、2000年から7年にわたって撮りためられてきた映像が元になってい

る。占領されているパレスチナ人側の視点と、占領をしている立場にある元イスラエル兵士たちの証言によって構成されており、「占領」の実態がより立体的に重層的に描き出されている。

2009年公開の映画ではあるが、映像が撮られた2000年代は現在起きている事態を考えるうえで、振り返るべき重要な時期だと思われる。和平交渉の期限が2000年に切れたことで、打開の糸口がまったく見えなくなった。こうした状況から、これまでのような民衆中心の抵抗運動ではなく、武装組織が中心となった第二次インティファダが起こった。パレスチナ人による自爆事件とイスラエルによる軍事攻撃が繰り返される一方、2002年から巨大な分離壁の建設がはじまった。2005年にイスラエルはガザ内部から入植者と軍を撤退させたが、代わりに厳しい包囲と封鎖をはじめた。イスラエルによって人や物資の出入りが制限され、定期的に軍事攻撃と破壊が繰り返されるなかで、ガザの人々は人工的な経済停滞と深刻な生活苦のなかに置かれ続けた。世界はそれを黙殺し、現在に至るまで放置してきたのである。

映画で証言する元イスラエル兵士たちは、NGO「沈黙を破る」(Breaking The Silence)のメンバーだ。ヨルダン川西岸の街ヘブロンでの兵役の体験を、2004年に写真展で告白し、イスラエル国内で大きな反響を呼んだ。彼らは無辜のパレスチナ住民に対する占領者としての仕打ちを証言すると同時に、個人のみならずイスラエル社会が、占領を行うことによって道徳的に崩壊させられていると分析する。創設者で代表の元イスラエル軍将校ユダ・シャウルは、映画のなかで「自分たちが抱える問題はイスラエル軍に限らない、世界のあらゆる侵略軍、占領軍が抱える普遍的な問題だ」と語る。この言葉のとおり、本作品は、かつて侵略を行い占領者であった日本の過去と未来をも問いただすものである。

土井敏邦監督は、1985年からイスラエル・パレスチナを取材しており、1993年にビデオジャーナリストとしての活動をはじめた。学生時代に出会ったテーマのひとつがパレスチナ・イスラエル問題だったが、出会ったもうひとつのテーマがヒロシマと被爆者だった。被爆者の富永初子さんとの出会いによって、韓国人被爆者を追いはじめた監督は、ドクターストップで韓国に渡れなかった富永さんに代わり旧日本軍による戦時性暴力被害者たちが共同で生活する「ナヌムの家」を訪ね映像を撮ることになり、自国の加害の歴史と向き合い続けてきた。イスラエル・パレスチナ問題と日本の加害の歴史、この二つのテーマに接点を与えたのが「沈黙を破る」の元イスラエル軍将校たちの証言だったという。監督のこうした問題意識が、映画『沈黙を破る』には生かされており、日本社会を生きる人々がパレスチナ・イスラエル問題と向き合う際の一つの道しるべになるのではないだろうか。

注記) 本企画の翌日、土井敏邦監督はWEBコラム「広河隆一氏への公開書簡」を公開した。フォトジャーナリストとして長年活動してきた広河氏に対し、2018年、複数の被害者から性暴力が証言され問題となったが、同コラムにより企画メンバーははじめて、土井監督が広河氏の性暴力と彼の実績を切り離すべきだと考えていることを知った。私たちは広河氏の実績は性暴力を生み出したシステムの一つとして切り離すことができないと考えており、土井監督にメッセージを送った。

ダイアログ

上映会の後、休憩をはさみダイアログの時間となった。数十人は会場を出たものの、多くの人が残りに、近くに座る人と小さなグループをつくってもらった。

グループの数が多いため、運営側それぞれが個別にファシリテーションに入ることはなかったが、最初に運営側からスライドを用い、ダイアログのグラウンドルールを伝えた。

1. 互いの話をよくきくこと
2. 自分にも誰かにも無理をさせない場をつくること
3. 一緒に考えること

何がダイアログをダイアログたらしめるかということは議論があるが、その集まりがダイアログであろうとするために、ルールが設けられるということが一つの条件ではないだろうか。

ダイアログとは「話し合い」と言い換えられることが多いが、「ききあうこと」がまずは重視されねばならない。とりわけ、それぞれがどのような感想や考えを持っているのかを丁寧に聞き取っていくために「1. 互いの話をよくきくこと」をもうけた。また「2. 自分にも誰かにも無理をさせない場をつくること」というのは、場のセーフティを誰かがつくるのではなく、互いにつくろうとしてみることを、それ自体を試みてみることをルールに盛り込んだ。これは、今回の映画にあるような、イスラエル兵たちが自らの加害に向き合った写真展で、ひとびとが緊張感を保ちつつも、決して誰かを攻撃したり、排除したりしないように気を払っている様子にも通じる場のあり方である。最後に「3. 一緒に考えること」というのは、前半で学びの場、あるいは他者の声をきく場を設定しつつも、互いに映画を見たひとりの人間として、どのようなことをいま考えているかを交換しあってもらうために設けた。専門知を持っているひとが、持っていないひとに「教えてあげる」という構図ではなく、互いに学び合い、考え合うという場を、ここでひらけるように気をつけた。

ダイアログのテーマは設けず、自由設定としたが、「この映画を見てどういま感じているのか」「現状をどう捉えているのか」「加害と向き合うとはどういうことか」など、いくつかテーマの提案を運営側から行った。ダイアログが始まると、自然に人びとは自己紹介などをはじめ（英語話者は、英語話者のグループをつくってもらい、英語で行った）互いに言葉をゆっくりと交わしていった。運営スタッフは、誰かにとって「無理をさせる場」になっていないかを気をつけながら見回りを行ったが、どのグループもなごやかに場をつくっていた。

会の終了後「ダイアログがあったからよかった」「話せるひとがいない中、ここで言葉を探すことができてよかった」などの感想をもらった。

是恒 香琳（これつね かりん）（ライター）

永井 玲衣（ながい れい）（おずおずダイアログ）